

Title	インダス文字に関するド・エヴェジイ氏の新発見(下)
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1934
Jtitle	史学 Vol.13, No.2 (1934. 8) ,p.147(325)- 154(332)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19340800-0147

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

インダス文字に關するド・エヴェジイ氏の 新發見 (下)

松 本 信 廣

予自身慎重の必要を説いた故自分からこれ以上を期待されてはならぬ。それが報告提出者に相應する所であり、今後新事實の列擧、想起が時と共に吾人の判断を裏書して呉れることであらう。

先づ最初に問題を二つのグループに分たう。第一はイル・ド・パークの木板に關する問題であり、第二は二文字を比較することによつて生起する諸問題である。

イル・ド・パークの木板に對し、まづその成立は數世紀前のもので比較的新しいものではないか、或いは又眞實古いものであるかを疑ふことが

出来る。次にそれがその島自體で出來たか、又は輸入されたものであるかといふ疑ひをたてること出来る。もしさうとしたならば何處から輸入されたかと云ふことになる。

木板の年代は何時かと云ふことに關して吾人は何等知惹する所ない。吾人はたゞ木が非常に長期に保存され得ると云ふことを知るのみである。ルーヴルにはエジプトの第五王朝、即ち紀元前四千年紀に遡る木像が陳列してある。従つて木質品の年代はあらゆる時代に比定することが出来る。

木板は輸入されたものであらうかどうか？ 此

點に就ては吾人はやゝ安心して返答することが出来る。返事は『然り』である。吾人はその種類を鑑別せんがため木板の木質を分析させてをる最中である。今日の科學がとり得る方法により數立方ミリメートルのものに分析を加へることが出来た。未だ實驗を初めたばかりに過ぎないが、最初發見された例の毛を纏いた木板の分析はこれが *Podocarpus* 即ちイル・ド・パークの内部に生育しない木であることを啓示した。現在の科學の狀態ではそれが赤道地帯、モルックやセレベス、中央アメリカにまで生育する *Podocarpus latifolia* であるか、ニュージーランドに發見する *Podocarpus ferruginea* を指すかは確めることは出来ぬ。何れにしるイル・ド・パークの土人が、その最重要木「槐」を示すミロと云ふ語はニュージーランドのマオリ語で *Podocarpus ferruginea* の名であることを認めることが出来た。

イル・ド・パークの木板の場合それが潮流により島に流れよせられた浮木ではあるまいかと云ふ假説を立てたものがある。化學者は今日でも海水に漬つてゐた木であつたか否かを決定なし得ることを自分に確言する。たゞ此分析には木板の數立方ミリメートルの容積では充分でないが、勿論如何なる博物館も自己の所藏を犠牲にすることを望まない。

その外に木が外部から輸入されたことを想像せしめる理由がある。それは島人の傳説である。僅か二十年もたたぬまに事實が變りゆがめられ傳へられるのを見、如何に傳説の史的價値が弱いものであるかを經驗によつて知られた諸君の中の多くは私がポリネシアの全歴史はその傳説で構成されると云ふと懷疑の念を抱かれるに相違ない。然しこの民族にとつて傳説の眞實さは比類がない。その宗教、その祭儀の基礎でさへあり、或島々では、

その變改を敢てした者を死刑にさへ處した。祖先の功業、その系圖の記憶は遠い過去に遡る。口傳系圖は、屢々百世代以上即ち、三千年以上にまで上り、ポリネシア人にとつてはその知識中の最神聖なものであつた。傳説教育は特殊な學校で、しかも常に最も森嚴な方法でなされた。歐人は離れた島々の系圖の間に交切線を作り、かくしてその系圖が正確忠實に保存せられてゐたといふ證據を得た。

このポリネシア人こそ吾人が今日よくその移住を知つてをるものである——といふのは吾人はそれを確實にインドネジーまで跡づけることが出来るからである。イル・ド・パークに文字を齎したのは航海者であり植民者であつた此民族に外ならぬ。なんとなれば、島民の傳説が、その酋長ホテウ・マテウアが此島に二隻の大舟と二百人の戰士、その家族と共に今から九百年も前に到着し、その

時まさしく六十七個の有銘木板を齎したと傳へてをる場合その所傳が確實で、木板の文字は、島に生起せず、よそから輸入せられたと説き得る理由が甚だ多いわけである。

然らばこの木板が何處から輸入せられたものであらうか。その足跡を今後ニュー・ジランドまで跡づけることは必ずしも大膽とは云ひ得ぬだらう。イル・ド・パークの住民はラロトンガの島から來たのであり、しかも此のラロトンガはニュー・ジランド人により植民されてをるのである。儀式習慣の或巨細な點と、より劣らぬ重要な言語上の或特性とは、常にイル・ド・パークの土人がニュー・ジランドに極めて緣故を持てることを常に想像せしめた。

然し暫く木板の問題を離れ、此の二體の文字間の關係の問題に移らう。第一に時間と空間上の差違から見て印度とオセアニアとが直接關係あると

云ふ假説は到底あり得さうもない。それなら文字の相似に就て吾人の認めたる所を何と解釋し得ようか。思ふに既にサー・ジョン・マーシャルの豫感によりこの答辯が與へられてをる。彼はそのモヘンジョ・ダロに關する著書に於て他の古代文字

と此の文字を比較しようと云ふ種々の企てを説明し、かゝる連結に警戒せんことを注意した。反對にもしスメル、エジプト、ヒツタイト、クレート、プロト・エラムの諸文字、また當然インダス文字の如き地中海とアジア西部の文字が聯絡なく個々進化したとすれば、それは言語が殊なる結果であり、全て同一無二の源に遡るべきではあるまいかと彼は考へる。彼は曰く「その基礎となれる諸原則是同一であり、全ては同一の源、恐らく遙か悠久の古へ、新石器時代にまで遡る淵源から出て來てをるのではあるまいかと思はれるふしがある。」此の新石器の文字、此のあらゆる文字の祖先を、

吾人はイル・ド・ポークの字板の中に發見するのではなからうか。此の島は、その發見當時文化が新石器時代の階程にあつたのである。かういふ結論より以外の語を吾人は到底信じ得難いと云ふことを告白させていたゞきたい。

此の最初の文字は何處に發生したのであらうか。既に極めて發達せる此の新時代の文化始源の祖國を何處に求むべきであらうか。此の文化は誰が之を一體發明したのであらう。アジアの東、太平洋に面せる暑熱地帯である極東の何處かではあるまいか。今の所未だ何處とはつきり名指しすることが出來ぬ。然しながら字板の存在はその曾つて存在したに相違ないことを立派に證據だててをる。何れにしるこれまで二つの方法が太平洋の極限とアジアの東部とを聯絡させてゐた。最初のもの、言語學的方法は自分は殘念ながら最大の弊害を生ん

だとしか云へぬ。確かに地球の此の二點間に言語上のつながりは存してをる。しかしながら今日存してをると信ずる關係、シュミット師の打建てたオーストリックの語族、ことにシュミットのオーストロアジア語族は自分がパリーのアジア協會に於て説明した様自分には存在しない様に見える。

此の點について自分はローマに開かれるこの九月の第三回言語學國際會議にもつと委しく述べる積りである。自分は後者を予の報告中に「誤れる語族」と提議し、世人が最早「オーストリック」、「オーストロ・アジアチク」の二名辭を使用せざらんことを發議しよう。なんとなれば之は現在何ものをも定義せず、またそれにより危険でさへあるからである。

それより一層眞實であり、眞面目であり、幸運であるのは諸君の如き考古學者が太平洋と南アジアとの間に打建てた絆なのである。觸知なし得る個

體に屬するが故に何故然らずと云ひ得よう。その上諸君はその同業者の仕事に興味を持ち、それにより比較檢證せられる。然るに言語學者はいつも専門外だと云つては同様な檢證から逃れるのに巧みである。

マンシュイ氏とヨラニ女史との印度支那、東京トシキンに於ける記念すべき發掘、次にオランダの學者ファン・カレンフェルスの調査、殊に最近に於けるオーストリアの學者ウインナ大學教授ハイネ・ゲルデルン男の研究は既にメラネシア人を此のほとりにまで導き、今日の支那國境にまで達せしめてをる。

メラネシア人とポリネシア人とは同じでない。然し恐らく他日吾人は此驚嘆すべき民族、比類なき航海民のアジアよりの移住を跡づけることが出来るであらう。吾々の祖先の沿海に沿ふて迂路曲折して航海してゐた時、彼等は紀元前千年も前、

既に海上遠く縦横に馳驅してゐたのであり、紀元六世紀には南洋に侵入し、何千キロと云ふ距離の遠く離れた島々の間を往復なしてをり、彼等と共にその妻女、子供、家畜と開墾地の必要植物まで齎し、全艦隊を率いてその島々に到達し、あらゆる時代を通じて最大な植民者であることを示してゐたのである。

既にハイネ・ゲルデルン男は、イル・ド・パーク住民の起源地に外ならぬニュー・ジラランドの土人文化と北支那の新石器時代との間に確實な關係の存在することを予に報じて呉れた。また共通ウラル・アルタイ語の無稽さを斷乎證明されたシロコゴロフ教授は北京から四月十八日附の手紙で、「ためにしに貴殿の文字を古代字に明るき支那人に見せた所彼等は之を漢字と認め漢語で讀んだ、之は大變不思議なことであり、恐らく意味あることであらう。自分は之をもつと充分資格ある支那人

人に見せるつもりである」と書き送つて來た。

是等は全て悉くなほ極めて漠然としてをり、此の領域内で自分のなし得た若干の小なる檢證も、また極めて曖昧模糊、未だごく皮相なもので自分は今此處で御話しない方がよいと思ふ。然しながら恐らく地球の此の部分に對する先史學上の吾人の知識が顯著な擴大をなす時は、遠い將來ではなからう。太平洋の兩岸間の商業が、今日大西洋間のそれよりも頻繁である様に、同様文明持參者の移住運動は、アジアの西方よりその東南に於てより以上強烈であつたと見ることが出来る。また人はよく忘れるが舊石器時代の終りと新石器時代の初めに恐らく此の時代のいかなる他處より、此の印度支那に於て人種の混合が行はれたのである。最後に自分はなほ一つの例を示さうと思ふ。それは絶對的に確實なものではないが、それを述べないではゐられぬ程自分にあまりに異様に思はれ

るからである。イル・ド・パークの木板に於てその人の横顔を示す方法は注意に價する。顔に主として記されてをるのは口であり、足は互ひに向きあつてをる。クメル藝術の古い遺物に同じ様な人間の相貌が見出だされたのは實に驚くべきことである。

古代印度支那に發見する個物に同じき今一つの形式は木板上の弓である。ポリネシア人の之を知らぬことモヘンジョダロと同様である。知惹してゐてもごく僅かであり、自分は皆で僅か二回しか發見しない。しかしその形は兩端が曲り、中央が少し凸出した點は全く同様である。

かういふ研究を進めて行き、よく他の類似を發見なし得るだらう。十年前誰もインダス文明のこゝとを知らなかつた様に、來るべき年はアジアの東部に非常に發達してゐた新石器時代の文明を顯示するかも知れぬ。

會長、淑女紳士諸君、

現在まで自分は唯一つの結論しか述べなかつた。即ちインダスとオセアニアとの文字は共に一つの源に屬すると云ふことである。その以外は單にそうであるかも知れぬと云ふ可能性として考へただけで僅かに自分の諸君に示さうと試みた一種の輪廓にしか過ぎないのである。それでも第二の結論、更に充分明瞭な結論にさへ到達することが出来る。諸君はどの程度にまでフランスの所領たる東京、印度支那がこの新しい問題にかゝはつてをるかと思ふこと、また如何に太平洋と印度とを結び得る文化的絆が全て此地方に集るかと思ふことを認めることが出來たに相違ない。

既に先史學は他の何れの科學よりもフランスの國土の育めるものであり、後、地中海とアジア西部大文明の調査に獅子王の役割を演じたのはまたフランスの學者である。印度支那が研究繼續のた

め指定された土地であるやうに見ゆるが故に自分は諸君の恐らく當然と考へる所の第二の結論に到達する。即ち先史學は、嘗に曾つて特にフランス科學たりしのみならず將來も亦しかあるべく、もつと明らかに云へばなほしかある機會に恵まれてゐるのであると。

以上がド・エヴェジイ氏の講演の概要である。

同氏がインダス文字とイル・ド・パーク文字との相似を指摘されたのは、確かに斯界に於ける一大貢獻である。たゞ同氏がその兩者文字の始原を新石器時代に求め、印度支那にその誕生地を求めようとするのは未だ證明を他日に期さねばならぬ大問題である。コラニ女史の發見した印章により印度支那の石器時代に文字の存在してゐることを推測せしめ得るが(前號餘白録參照)それだけで未だ古代文化の存在したと云ふ砂上の樓閣を建てるこ

とは困難である。シロコゴロフ氏の手紙に見ゆる支那人の意見も極めて漠然たるものであり、自分等は到底之に贊同出來ない。また著者は、考古學の研究に滿腔の信賴を表白してゐるが、現在の研究状態で大きな綜合をなし東亞南洋の古代史を跡づけるハイネ・ゲルデルン男等の研究に自分は遺憾ながら今の所懷疑の念を抱いてゐる。考古學的にも言語學的にも東南アジアと南洋は、尙深く深く調査されねばならぬ。そしてその結論はごく慎重に徐々として歸結されゆかねばならぬ。が然しド・エヴェジイ氏の發見は兎に角劃期的の事件として、確かに同方面の研究者に刺戟となり、新しい研究目標を提示したと云はねばならぬ。同氏の功績を讃えんと共に今後此の難解な大問題の解決に氏の一層の研鑽を囑望したい。